

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Confidence women in Atwood's Alias Grace

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻本, 庸子, Tsujimoto, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/681

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



嘘をつく女：Alias Grace 考

辻 本 庸 子

はじめに

1849年のアメリカでは「元祖信用詐欺師」(The Original Confidence Man), すなわち大物のペテン師が世間を騒がせ、*Merchant's Ledger* 誌に次のような記事が掲載された。「この逮捕された哀れなペテン師が、人が人を信用させるという単純な手段に訴えて、これほどの商売をやったのけたということは、この19世紀に美德や人間性といったものが全て姿を消したわけではないという証拠といえるだろう。喜ぶべきかな……騙されるということとは」ⁱ。Warwick Wadlington は、この例のように、信用詐欺師を必ずしも否定的にとらえないことをアメリカの特質としてとらえ、伝統や組織に頼らず一人で物を売り歩く行商人こそ、アメリカ人が好む自己信頼のアイコンだとする。その行商人がみせるずるがしこさも、売り手の自己信頼と、買い手の自己信頼の真剣勝負の結末にすぎないと。ワドリントンはそもそも「アメリカ人というものが、これまでいつも、いろいろな意味で、信用詐欺師であった」(9)とまで述べている。

ちょうど同じ頃、カナダで扇情的な殺人事件が起こり人々の注目を集めた。その事件を Margaret Atwood が小説 *Alias Grace* (1996)ⁱⁱ として再構築し発表した。この中には、正真正銘の信用詐欺師である行商人が登場する。加

i Warwick Wadlington, *The Confidence Game in American Literature* (Princeton: Princeton UP, 1975), 11.

ii Margaret Atwood, *Alias Grace* (New York: Nan A. Talese, 1996) 以後このテキストを『別名グレイス』と表し、引用は括弧内にAGと頁数を記す。

えて主人公の Grace Marks も confidence-man ならぬ confidence-woman と呼べるかも知れない。行商人、信用詐欺師といえは男性の専売特許のようにみなされがちだが、女性版信用詐欺師の場合も男性と同じように、自己信頼のアイコンと評価されうるのだろうか。『別名グレイス』^{エイリアス}において「嘘をつく女」がどのように描かれているかを検証してみたい。

詐欺師の企み

1843年7月23日にトロント近郊の村で、Thomas Kinnear と、その召使いで愛人関係にあった Nancy Montgomery が殺害された。すぐにキニアー家で召使いとして働き、事件後に遁走していた James McDermott と16歳のグレイスが殺人犯として逮捕され、裁判で有罪判決を受ける。11月にマックダーモットは絞首刑。しかしグレイスは終身刑に減刑され、この物語の始まる1851年には、刑務所に収監され、昼間は刑務所長の家の小間使いとして働く生活を送っていた。1859年に彼女の病歴や犯罪の真相を明らかにするため、アメリカ人の精神科医 Dr. Simon Jordan が彼女のところに送られてくる。ジョーダン医師はグレイスからいろいろな話を聞き出すが、謎の解明にはいたらず、その打開策として別の医師による催眠治療も行われた。その直後、ジョーダン医師はグレイスの治療を途中で断念して帰国し、南北戦争に出兵。負傷して記憶障害をおう。一方グレイスの方は1872年、ついに恩赦を受け、キニアー家時代から懇意だった男と結婚し、アメリカで新しい生活を始める。ここで物語は幕を閉じる。

先にも述べた通り、この小説は実話に基づいているため、たくさんの先行資料がある。事件の裁判資料、カナダの詩人 Susanna Moodie が書き残したメモワールⁱⁱⁱ、当時流布していたこの事件のバラード、新聞記事などなど。これらが小説の最初や各章の冒頭に引用され、物語に先行する形で事件を紹

iii Susanna Moodie, *Life in the Clearings* (New York: De Witt & Davenport, Publishers, 1853)

介する。読者はこれら様々な先行資料で書かれたことを了解した上で、どのような事件の真相がこの小説内で明らかにされるのかという興味に引かれ、読みすすめて行くことになる。

ジョーダンとは、グレイスの生い立ちを聞き出し、また夢や連想ゲームからその深層心理を探ろうとするが、それは思ったようにはかどらない。その責任の多くは被験者であるグレイスにある。彼女はジョーダンに好意を持ち、面会の時間を楽しみにするものの、素直に真実を語ろうとはしないからだ。たとえばジョーダン医師が最初にグレイスの所へやってきた時、一個のりんごを差し出した。新鮮な果物に飢えていたので、のどから手が出る程欲しかったが、食べる姿を見られたくないグレイスは「食べるとなくなるから」と答えて自分を抑制する。そして医師の喜びそうな、自分の欲望、りんごにまつわる思い出、イヴの罪や誘惑といった話題を意識的に避ける。「あの人たちにはいつでも正しい答えというのがある、正しいと言うのはつまりは、あの人たちが望む答えということなのですが、こちらの推量があたったかどうかは、その顔つきを見ているとすぐわかります」(AG40)と語るグレイスは相手の魂胆を見すかしている。わざとバカな女の仕種をしたり、下らない話題を持ち出したりし、「あなたに嘘を言うかも知れません」(AG41)とまで言っている。それでもジョーダン医師は「私が聞こうとしてるのですから、あなたは話をしてくれなければいけません」(AG41)とグレイスに語ることをあくまで要求する。

しかしジョーダン医師が話を強要したところで、このようなグレイスが相手では彼の望むような結果が得られるはずはない。その膠着状態を打開するため、当時人気のあった催眠治療を試みようということになり、登場してきたのがヨーロッパで修行をしたというふれこみの Dr. Jerome DuPontであった。実はこの男こそ Jeremiah という詐欺師である。彼は以前、グレイスがひいきにしていた小間物の行商人で、事件の直前にキニア一家を訪れていた。彼はその時、行商をやめて催眠治療師になるから相棒の霊媒師にならな

いかとグレイスにもちかけた。結局、彼女はこの誘いにのらなかったが、それが今偶然にも、多くの人の見守る前で実現したのである。デュポン医師はしたり顔で治療を行い、グレイスも知らぬふうを装って治療を受ける。そこから明らかになったのは、グレイスの二重人格であった。「やはりあなたはあの事件の犯人だったのね」と言われたグレイスは答える。「バカなことを言うんじゃないよ。何もわかつちやいない。私はグレイスじゃないよ。グレイスは何も知らないんだ」(AG401)「あの娘は何も知らない。私が彼女の服をちょっと借りているだけだ(中略)この世の殻、肉体という衣服を。あの娘が窓をあけておくのを忘れたので、出ていくことができなかったんだ」(AG402-403)。ここからグレイスの親友で、墮胎の失敗から不幸な死を遂げた Mary Whitney という女の亡霊がグレイスの体にとりつき、犯行に及んだという説が、非科学的ではあるものの信じられるようになる。後にグレイスがまた別の人物になり済まして見せ物小屋に出ているジェレマイアに、気をつけないとあの時の嘘がばれてしまうと手紙を書いていることから、この時の催眠治療のやり取りが、やはり二人の演技であったことがわかる仕組みになっている。

ジェレマイアが行商人であったことも、詐欺師であることもグレイス以外の誰も知りもしない。彼の演技も巧みであるが、死んだメアリーの皮をかぶって、自らを救う大芝居をやったのけたグレイスの演技も見事である。彼女はかつてジェレマイアから「俺とお前は同類だから」(You are one of us)と言われた。またジョーダン医師から「私は君を信じるよ」という告白も引き出している。だとすれば、グレイスは相手を信用させて騙す、この作品の中のもう一人の信用詐欺師だと言っても間違いではないだろう。しかしながらこの催眠治療は、被験者のグレイスよりも、ジョーダン医師により大きな転機をもたらすことになる。

これまで彼はグレイスに対し、医師としてきわめて理性的、紳士的な態度を保ち続けてきた。弁護士、医者、牧師といった多くの男性が、刑に服する

グレイスを弄んできたと思われるが、ジョーダン医師は決してそのような行動には出なかった。その実、若くて美しいグレイスに対する欲望は抑えがたく、それを、夫が失踪して困っている下宿屋の女主人に向けたため、彼らはぬきさしならない状態に陥っていた。催眠治療の中でグレイスは「あんたの横の小ねずみに気をつけるんだよ。身の毛のよだつねずみ穴にもね」(AG400)と彼に忠告をする。その晩、下宿に戻ったジョーダン医師は、このままでは、女主人にそそのかされて殺人を犯すはめにもなりかねないとさとり、突然、グレイスの世界からも、下宿屋からも足を洗って、アメリカへ逃げ帰って行く。グレイスはその演技によって、自分ばかりでなく、ジョーダン医師をも窮状から解き放ったことになる。

解釈という暴力

この小説では、作者が作品の中で明示している文献が数多くあるが、それ以外にも作者が明らかに念頭においていると思われる文献がある。たとえばジョーダン医師はヒステリー患者とされているグレイスの夢判断を試みるし、その下宿屋の小間使いは Dora と名付けられている。ここから Sigmund Freud がヒステリーの症例としてあげている「あるヒステリー患者の分析の断片」、通称「ドラの症例」(1905)^{iv}が透けて見えてくる。ドラの治療は、グレイスの治療同様、途中で終わったが、フロイトはこの症例に関する論文を発表し、そこでヒステリー疾患の原因が性心理生活と密接に関連すること、またヒステリー症状はその患者の隠され抑圧された願望の表現であることを明らかにした。そして「この密接な関連性を暴露し、秘密を明るみに出し、それを報告すること」(277)が医師の義務だと述べている。フロイトはここで、患者の断片的な声を集め、それを整理して解釈を導きだし、精神分析の技法を構築する絶対的な知の権力者となる。彼によれば、ドラの夢における宝石箱、墓、駅、財布などは女性性器を、財布の開け閉めは自慰行為、前庭

iv ジークムント・フロイト 『フロイト著作集』 vol.5 人文書院 1981.

は象徴的な女性性器の地図とみなされる。そしてこれら一連の解釈を総合して、ドラの父への愛情、K氏への愛情、さらにはドラのK夫人への同性愛など、驚くような解読結果が明るみに出される。もちろんこの論文にも、細部を見れば、理解に苦しむような歪みが存在することも事実である^v。また治療が中断したこともあり、フロイトが弁解や自己防衛に走っているところもある。しかしそれでもあえて出版するからには、やはり自らの解釈への強い自負があったと思われる。フロイトはこのドラの症例を手紙の中で「私の、錠前をこじあける道具のコレクション」(my collection of picklocks)^{vi}の一つになるといっているが、まさに彼の治療は、解釈を通して人の心をこじあける行為に他ならない。

しかしながらこのようなフロイトとは対照的に、『^{エイリアス}別名グレイス』においてジョーダン医師は、どれだけグレイスの話を聞いても、そこから隠された事件の真相を読み取ることはできない。むしろここからあぶり出されてくるのは、グレイスその人ではなく、聞き手であるジョーダン自身の抑圧された欲望である。グレイスの美しさに心引かれるばかりでなく、その体から立ちのぼる「煙のにおい」、それはフロイトにおいて最も抑圧された誘惑思考に属するものと説明されているが、くぐもった、湿り気のある、熟れたにおいのかぎり、「雌の動物」としてのグレイスの存在を意識せずにはいられない。彼女の針に糸を通す何気ないさますら肉感的であり、彼はまるで毛が逆立つような感覚、流砂に足を取られたような気分^{vii}に陥る。これらはヒステリー患者グレイスの状態を物語るものではなく、グレイスに対し、視覚的、聴覚的、触覚的にジョーダン医師がどのように反応したかという、細かい記録と

v 例えば自分の患者に「今後ドラという名を与えようと思う」といっておきながら、「メデアは、クロイザが自分の二人の子供達と親しくなったことに満足していた」(317)というように、突然ドラの本名を露呈させているところが、一ヶ所存在する。また「私に向けられていた転移を形成している徴候をまとめてみると、あるとき面接中に私に接吻してもらいたいという願望が生じたのであろうという見解に達するのである」(327)と急に転移がフロイト自身に向いたことを言及しているところもある。

vi Sigmund Freud, *Dora: An Analysis of a Case of Hysteria* (New York: Simon & Schuster, 1997), vii.

なっている。

彼が下宿の女主人と深い関係に入っていくのも、グレイスという許されない女性への愛情を転移させた結果といえるだろう。それは夢の中で、夜着にくるまるグレイスとはじめて関係を持ったつもりが、実際は相手が女主人だったというくだりからも明らかである。やがて二人は、抵抗する女と犯す男、強欲な銀行家と文無しの女といったロールプレイや、殴ったり泣かしたりという、過激な夜の快楽を楽しむようになる。このような女主人との間に露見してくるジョーダンの暴力性は、グレイスにふるうことのできない暴力を女主人に転移させたものと考えられる。しかしそれと同時に、これはグレイスの話を解釈することができない、解釈という暴力をふるうことのできない医師ジョーダンの転移された快楽と見ることもできるだろう。結局はグレイスから離れ、解釈を断念したジョーダン医師とは異なり、フロイトは、不確かなものをこじ開け、そこに隠された真実を暴露しようとする。知識に裏打ちされ優位に立つ医師が、病める患者を診断する。学問、科学、真理といった権威の名の元に行使される暴力。しかしながら『別名グレイス』^{エイリアス}においては、分析をしようとすればする程、露呈されるのは被験者ではなく、それをしようとする医師その人の内面であった。そして彼が行う解釈という行為の持つ暴力性も彼の女性関係を通してあぶり出されることになる。この後、南北戦争に従軍したジョーダンは負傷して記憶障害を負い、看護にあたる女性をグレイスだと信じて慕うことになる。記憶障害を治癒する立場から、される立場へという運命の逆転を、もう一度、文字通り生きることになるのである。

語る女の手

物語冒頭からグレイスは不思議なこだわりを手に見せる。「手袋をつけてはいないけれど、私はひざの上で両の手をきっちりと組んでいます。私が欲しいと願うのはすべすべして、白い、しわ一つなくきっちり手にあった手袋」(AG21)。けれども実際にはそのような白い手袋で包まれることのない彼女

の手は、労働で酷使されつづけて荒れている。この手に対するこだわりは、彼女の特質をあらわしているといえるだろう。幼い時にアイルランドからカナダに渡ってきて以来、グレイスは住み込みのメイドとして働き続けてきた。富裕な家で、富裕な人間たちの生活を身近に見てきた彼女にとって、手袋は豊かさの象徴であり、彼女の手袋への憧れは、淑女のような生活、そしてそのような生活を手に入れることへの憧れでもあった。殺されたナンシーは、キニアー家の召し使いであったが、主人の愛人でもあったため、贅沢が許され、高価な衣服や手袋、装飾品を身につけており、それがナンシーへの羨望、嫉妬をグレイスの中にかき立てていく。

しかし手はそのような彼女の物質的な欲望の表象だけにとどまらない。グレイスの一番の特質はその手先の器用さにあった。裁縫で十分、自立することができると言われるぐらい、彼女の裁縫の腕は際立ち、だからこそ重宝がられて刑務所長のメイドにも抜てきされたのである。文字どおり、手は彼女にとって、生きる方便となる。さらに言えば、この彼女の手がつくり出す作品は、彼女が言葉を使って明かすことのない、自分の内面を吐露する表現媒体となっていくのである。

手先が器用で、見事な刺繍をする女性といえば、*Scarlet Letter* の Hester をあげることができるだろう。実はジョーダン医師がグレイスを支援している牧師を尋ね、そこで『緋文字』以降、つとに官能的、非道德的だと噂される N. Hawthorne の作品を牧師が読んでいると驚くくだりがある。刺繍をする女、牧師、医師といえば、まさしくそれは『緋文字』の構図であり、アトウッドがそれを念頭において『別名グレイス』を作り上げたと考えても間違いではないだろう。『緋文字』の序文において、語り手は自分が物語を始める一番の動機が刺繍からの触発であったことを明らかにする。「私の目はその古びた赤い布地に引き寄せられ、そらすことができなかった。確かにそこには深い意味があった。何よりも解釈に値し、その神秘的なシンボルから流れ出して、私の感性に微妙に訴えかけるが、分析は拒むもの（中略）私は

それを自分の胸につけてみた（中略）すると身体的とはい切れないものの、まるで燃えさかる熱気を胸にしたようなショックを感じたのである。緋文字が赤い布ではなく、赤く焼けた鉄であるかのような^{vii}。この身体的ショックを契機に語り手は緋文字の物語を語りはじめる。ここでその語り手の、あるいはホーソンの刺繍解題がどのようなものであるか言及する余裕はない。ただグレイスは言葉によらない手で生み出した刺繍の解説を、感性豊かな男性の手に任せるのではなく、自らの手に奪還したと言える。分析を拒むものを無理矢理こじ開け、解釈しようとする、物語ろうとする、父なる神経病学、文筆家の権力の行使を拒む。そして言葉というものの空しさ、無力さを誰よりも知っている彼女は、言葉によらないメッセージを次の女性たちへと伝承するべく、針を刺すのである。

しかしながらこの作品を、「男性言説」対「女性言説」という構図だけで読み取ることができないことにも留意しなければならない。この作品はそもそもアトウッドが、カナダ女性詩人のムーディが描いたグレイス像に反発を感じて、生まれたものである。彼女はその状況をインタビューで次のように語っている。「私がいつも気になったのは、ムーディの書いた話があまりに大仰だということです。本当にこんな具合だったのだろうかと首をかしげました。事実を確かめると、やはりそうではなかった。つまり彼女はかなりの装飾（a certain amount of embroidery）を施していたのです^{viii}」。同様の見解は作中でも明らかにされていて、牧師とジョーダン医師は、会話の中でムーディに言及し、彼女が文筆家であり、女性であるがゆえに、「装飾」（embroider）を施す傾向があり、信頼に値しないと話している。ここでは比喩的な表現であるにしても、刺繍する（embroider）という女性の行為が、そして女性の言説が必ずしも積極的に評価されていない。

実際、ムーディは『開拓地の生活』において、流布した噂どおりの、犯罪

vii Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* (New York: Norton, 1988), p.25.

viii アトウッドとダブルディのインタビュー。(http://www.randomhouse.com/resources/bookgroup/aliasgrace_bgc.html)

者、精神異常者としてグレイスの悲惨な姿を描いている。そもそも刑務所や精神病院を訪問し、観察するムーディの意図は、醜い現実の中に潜む神の恩ちょうをたたえるところにあった。「最も卑しい、墮落した者の中にも、いくばくかの善の痕跡が残っているものである。その罪の暗黒、腐敗の中に残った神性の燃えかすが、消えかかった残り火に火をつけ、彼らに生命と自由を再びもたらすのである」(242)。したがって現実が醜ければ醜い程、そこからの蘇りを可能にする神の業はあがめられることになる。そのような状況において、グレイスや事件の新たな真相が追求されるはずもない。それでは男性の権威的な言説を否定し、女性のセンチメンタルで敬けんな言説も否定したところから始まるグレイスのキルトづくりから、何を読み取れば良いのだろうか。

死を孕む女たち

この小説を最後まで読みとおしても、グレイスが犯行にどのようなかかわっていたのか、グレイスはどのような男性関係を持っていたのかといった、多くの読者がもっとも関心を寄せるであろう事柄の真相は明らかにならない。それでも医師から患者へと転落したジョーダンとは対照的に、グレイスは最後に自由を手にするばかりか、結婚という新たな生活も手に入れる。なぜ彼女が「勝ち組」となったのか。それは何よりも彼女が、「作られた女の言説」に積極的に依拠し、それによって自分の暴力性を見事に隠ぺいしたからである。ここで「作られた女の言説」の代表としてあげられるのは、19世紀後半のアメリカやカナダで一般的に流布していたヴィクトリア朝的女性観、すなわち女性の純潔、従順、敬けんさといった「真の女らしさ」崇拝に根ざした言説である。また逆説的ではあるが、ヒステリー言説もその一例にあげることができるであろう。ヒステリーはフロイトを待つ間でもなく、19世紀末のアメリカにおいて「女であることに限りなく近似值的な病^{ix}」とみなされていた

ix 富島美子『女がうつる：ヒステリー仕掛けの文学論』勁草書房 1993, p.1.

た。身体的苦痛や倦怠感、失神、発作、性的なものへの過剰な反応など、いささかの精神的な混乱を来せば、女たちはすぐにヒステリー患者とみなされた。グレイスは事件の肝心なところになると、「気を失いました」「記憶にありません」と答えることによって、ヒステリー患者とみなされ、過失責任を免れることになる。さらにひ弱い女が暴力的な犯行に及ぶはずがないという思い込み。進化論のお墨付きによって、劣等種である女は理性的な思考能力に欠け、実際的なことしか判断できないという思い込み。担当弁護士はこれらの社会通念を利用して、グレイスに馬鹿な女を装うようにと助言を与えた。彼女はその助言を取り入れておろかな女を見事に演じ、逆境を乗り切っていくのである。状況に応じて、甘える表情、おろかな顔つき、病的な表情などを使い分けるグレイスを、作中のある医師は、「超一流の女優であり、最もたけた大嘘つき」(AG71)と評している。

最後にグレイスが手にした結婚は、「作られた女の言説」からすれば、理想的な結末と考えられる。もちろんグレイスが結婚によって、それまでになかった幸せ、安定を手にしたことは確かであるが、そこには微妙な要素も描き込まれている。結婚した夫はかつてキニア一家で働いていた時の友人で、裁判のとき、彼女に不利な証言をしたことを悔いて、無罪放免となった彼女を引き取り、結婚を申し出たのである。彼はそれからことあるごとに彼女に懺悔をくり返す。彼女は許しを与えるべきは、犯罪人の自分でないと思いながらも、苦しかった思い出を語れば語るほど喜ぶ彼の異常な熱意に負け、許しを与える役を演じる。異様なサド、マゾの世界とも思えるこの結婚生活についてグレイスは「そんなふうには許しを与えるなんて、とんでもないと思うんです。だってそれは嘘をつくっていうことですから。もちろんこれが私のはじめての嘘だなんていうつもりはありませんけれど。メアリーもよく言っていました。天使もつくようなちょっとした嘘は、世の中の平和と静けさのためにあるのよと」(AG458)。夫ばかりではない。彼女の一言一句に目を輝かせ、凄惨な話を求め続けた医師ジョーダンもまたこの夫と同類と言えるだろ

う。グレイスは嘘をつくことで、相手が求めることを言ってやることで、「少なくともこの世で何か役に立ってるんだと感ずることができたのです」(AG457)と言う。だとすれば彼女が嘘をつくことは、あくまで相手を思いやったきわめて道徳的な、非道徳的行為といえる。このように幸せな最終章のはずの結婚は、嘘と切っても切り離せないものとして提示されている。

この小説では各章の冒頭に、伝統的なキルトのパターンがのせられている。グレイスは当時の多くの女性たちがそうであったように、数多くのキルトを縫い上げてきたが、結婚後、はじめて自分のためのキルト作りをした。それは最後の章の冒頭にのせられている「天国の木」で、彼女は一番気に入ったこの図案に、秘密の意匠を縫い込んだ。すなわち「蛇の一匹や二匹がいなくては、主題そのものが成り立たなくなってしまう」(AG460)とつぶやきながら、中央の木の周りに蛇を這わせたのである。さらにはメアリー、グレイス、ナンシーの三人の服のはぎれを使って縫いとりをし、それで「我々はこれで一つになった」(And so we will all be together)と言う。少なくとも彼女にとってこのキルトを縫う作業が、深いつながりを持つ三人の女の共同作業と認識されたことになる。メアリー、ナンシーとの間にグレイスが感じる一体感。ここからギリシア神話の恵みを与える三位一体の美の女神、Three Graces が連想できるだろう。三人の女たちはみな、若く美しかった。けれども貧しく、メイドをして働かなければならなかった。嘘を言うしたたかさや、自分で運命を切り開く積極性も持ち合わせていた。けれどもメアリーもナンシーも主人といえる男性と関係を持って妊娠し、それが元で死を迎えることになる。彼女たちにとって妊娠は、希望でも未来でもなく、まさしく死を孕む行為であった。これは結婚神話、母性神話に彩られた女性言説を大きく覆す。もちろんグレイスは他の二人とは違い結婚したわけだが、46才になった彼女は今、体に異変を感じ、それが妊娠かもしれないし(だとすれば奇跡だといっているが)、腫瘍かもしれないと言う。腫瘍だとすれば、文字どおり彼女もその体内に死を孕んでいることになる。

まとめ

1840年代のカナダにおいて、もっとも悪名高い女として人々をにぎわせた女、それがグレイス・マークスである。セックスと暴力、そして不服従。彼女はセンセーショナルな女として、その時代の人々に格好の話題を提供したに違いない。それがアトウッドの手によって蘇った時、それまでとは異なった人物として我々の前に姿をあらわす。極悪犯罪人、精神病患者でなく、「嘘をつく女」、すなわち女信用詐欺師として。K.De Graveは、19世紀に現れた女信用詐欺師を「変装、ペテン、ごまかしを用いて、人間らしくなる女たち」と定義づけている^x。それまで沈黙をしいられてきた女性が、信用詐欺師として智恵の限りをつくして人を騙し、それによって社会の定める枠から抜け出して人間性を取り戻し、既存の秩序の転覆をはかったと。しかしそのような19世紀後半に多く存在したといわれる女信用詐欺師は、アメリカのアイコンともみなされた男性の信用詐欺師と違い、歴史の中に埋もれてしまっている。ここでアトウッドが再生した詐欺師グレイスの場合も、嘘をつくことは否定的な意味合いを持たず、むしろ生き抜くための不可欠な手段となっている。彼女は他の誰よりも、利発で、鋭敏で包容力がある。女主人との関係に心奪われ、治療もうわのそらのジョーダン医師に「悩みを持つ者は、他の人の悩みにも敏感だから」と言って励ますのは、グレイスである。そして一人称の語りを通して、語る自由、口を閉ざす自由を手に行っているのもグレイスなのである^{xi}。

19世紀の女性たちは、こうあらねばならないといった既成概念にしばられ、本音と建て前のずれの中で自分を見失いがちであった。ヒステリーという病は、そのような女性たちを病人と診断することによって、既成の枠の中に囲いこむ装置だったと言えるだろう。しかしグレイスはこれまで見てきたよう

x Kathleen De Grave, *Swindler, Spy, Rebel: The Confidence Woman in Nineteenth-Century* (Columbia & London: U of Missouri P, 1995), p.245.

xi 53章中、グレイスの一人称の章は、32章。三人称で語られている章は16章。他は手紙やバラードの章である。

に、そのようなステレオタイプのな女性言説を逆に利用して、自らの犯罪の真相を隠ぺいすることに成功する。それによって絶対的、科学的な力でもって、女性自身をテキスト化しようとする男性言説にとじこめられることもなく、またセンチメンタルで宗教的な女性言説に閉じ込められることもない。むしろ逆にそこからそれら既存の言説が持つ暴力性、虚偽性を暴き出していく。このような既存の言説を否定したグレイスが、最後に表現媒体として選ぶのは、言葉ではなく針と糸で紡ぐキルトである。彼女はそこに秘密のメッセージを埋め込んだ。女が孕むのは子供ではなく死であること、人生に嘘は不可避であること、ベッドはきわめて危険な場所であることなどなど。しかしグレイスが発するこれらのメッセージは、明確に伝えられることはない。そのキルトを見た人々は、それを自分なりに解釈し、理解し、また異なったメッセージを込めて、次の人に送り継ぐだけである。その表現はあくまで断片的で抽象的であり、それぞれが「^{パリンセプト}重ね書き」をするにすぎない。

このようにグレイスは、語る権限を手にはしているが、自分の語る嘘や真実、沈黙の限界をも認識している。事件の真相を解明するため証拠集めに奔走するジョーダン医師を見て、「有罪であるかどうかは、あなたが何をしたかではなく、他の人があなたに何をするかで決まる」(AG 379) ことをわかっていないと嘆く。それは物事の輪郭というのがきわめて曖昧なもので、嘘とか真実といった事柄の輪郭線さえはっきりしておらず、それを決定するのは、周りを取り巻く人や物、すなわちその^{コンテキスト}文脈であるということであろう。グレイスが最後に自由を手にしたのも、彼女がこの道理を熟知し、^{コンテキスト}文脈が自分に有利に働くよう腐心したからである。この物語を通して焦点が当てられるのは、グレイスの罪の真相ではなく、真相の輪郭の曖昧さに他ならない。

人はある対象を見た時、そこに自分の見たいものを見る。したがって複数の人によってグレイスが描かれれば、その数だけの「^{エイリアス}別名グレイス」という像が誕生することになる。フロイトしかり、ムーディしかり。ただし普通の書き手は、少なくとも自分のグレイスこそは「本物のグレイス」だと信じて

疑わない。しかしアトウッドはそうではなく、むしろ自分のグレイスはどこまでいっても「別名グレイス」^{エイリアス}にしかすぎないと、この表題で堂々と宣言していると言える。それは真実のグレイス像を求めるものにとっては始めからの敗北宣言のようにうつるかもしれない。しかしアトウッドは人を細部まで忠実に書けば書く程、そこには矛盾し、一人の人物像として破たんする程の変ぼう自在さ、多面性が表出すると考える。媚びながら抵抗する。甘えながら邪険にする。グレイスはメアリーでありナンシーでもある。そういう矛盾、混沌、破格さは人によれば居心地の悪い、不快なものであろうし、未完の作品という致命的な印象をもたらすかもしれない。事件の謎は解きあかされることはないし、結婚でめでたく幕を閉じることではなく、死を孕み不安を抱えたまま物語が終わってしまう。しかしこのような輪郭の不安定さは、語ること、描くことの断片性を認識するアトウッド、^{パリンセプト}「重ね書き」の限界を受け入れるアトウッドの正直な見解と言えるだろう。

女信用詐欺師グレイスは、語る自由も沈黙する自由も手中に入れ、生き抜いた。その一方で自分の限界、断片性を認識しながら、キルトという伝達媒体を受け継ぎ、次に託していく。アトウッドも、このようなグレイス像を再生するという作家としての自由を行使したが、その一方で『別名グレイス』^{エイリアス}という表題をつけ、作家としての限界を表明している。この両者の共通点に思いいたる時、作家アトウッドのまた別の姿が浮かび上がってくる。それはもう一人の「嘘をつく女」、すなわち女信用詐欺師としてのアトウッドの姿である。

参考文献

Atwood, Margaret. *Alias Grace*. New York: Nan A. Talese/Doubleday, 1996.

De Grave, Kathleen. *Swindler, Spy, Rebel: The Confidence Woman in Nineteenth-Century America*. Columbia and London: U of Missouri P, 1995.

- Freud, Sigmund. *Dora: Analysis of a Case of Hysteria*. New York: Simon & Schuster, 1997.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. New York; W.W. Norton & Company, Inc., 1988.
- Moodie, Susanna. *Life in the Clearings*. New York: De Witt & davenport, Publishers, 1853.
- Nischik, Reingard M. ed. *Margaret Atwood: Works & Impact*. New York: Camden House, 2000.
- Wisker, Gina. *Margaret Atwood's Alias Grace*. New York: Continuum, 2002.
- Wadlington, warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton: Princeton UP, 1975.
- 富島美子『女がうつる：ヒステリー仕掛けの文学論』勁草書房 1993。
- ジークムント・フロイト『フロイト著作集』vol.5 人文書院 1981。
- http://www.randomhouse.com/resources.bookgroup/aliasgrace_bgc.html